

ニュースレター

2007
9

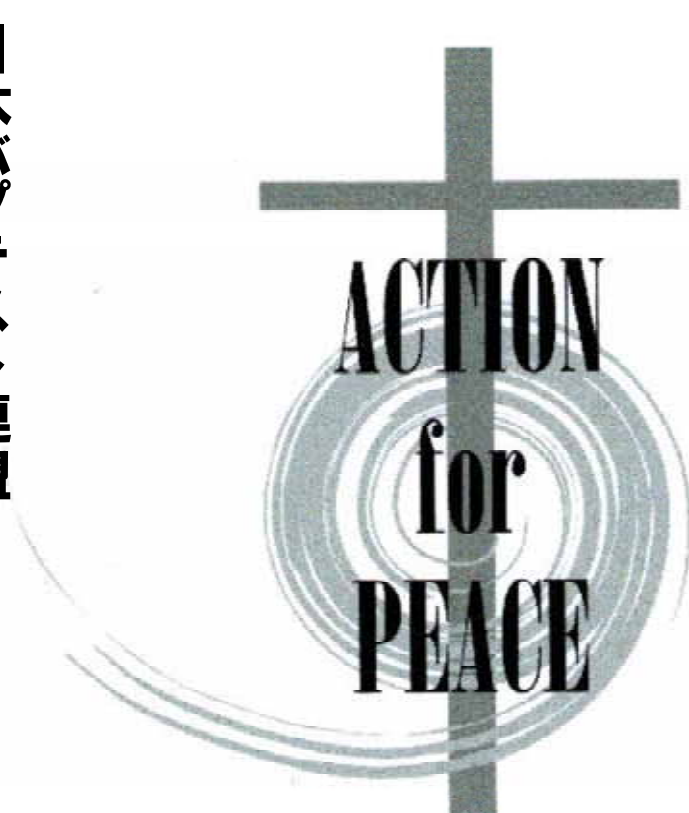
26

NO.6

さいたま市
南区南浦和
1-2-4

日本バプテ
スト連盟

日本バプテスト連盟 憲法改悪を許さない私たちの共同アクション



柴田かおり(宣教研究所所員・日本バプテスト浦和キリスト教会員)

9月24日(月)北関東地方連合女性会の1日集会が、久しぶりに開催された。朝早くから、140名弱の女性達と15名ほどの子どもたち、そしてナースリー担当の青年達が、会場である浦和教会に続々と集まってきた。午前には、日本バプテスト女性連合会長の村松直美さんから「主のわざを担う者」と題した講演。戦前から女性連合の歴史を紐解き、歴史に聴く大切さを説かれ、それがまた教会に根ざした信徒活動であったことを強調された。そして、礼拝を中心とした教会生活から押し出される「世界伝道」でなくては意味がない、と励まされた。

午後には、11のテーマ別分団に分かれて、学びと交わりを持った。その内の1つの分団が「女性の立場で見る平和、憲法9条」で、何とその分団には25名もの登録があり、発題者から話を聞いた後は2つに分かれて分かち合いを持ったそうである。発題は浦和教会の中嶋名津子さんと、自身が長でもある同教会社会委員会の活動を紹介する形で、キリスト者としての平和への取り組みが話され、それを受けた分かち合いでは、それぞれの経験や思いが話された。日頃何かしなくてはならないながら出来ずにいた一人ひとりの出会いの場ともなった。戦前戦後を生きてきた女性達から、今幼子を抱え生きる女性達までが共に、女性の立場で平和について語る重さと希望を教えていただいた。

憲法改悪を赦さない私たちのニュース

ニュース 各地での宣言文・声明文

日本バプテスト連盟堺キリスト教会 8月平和セミナー宣言文

沖縄戦における「集団自決」への日本軍の関与を否定する意図で、“大江・岩波・沖縄戦裁判”が起こされている。係争中のこの裁判などを理由に、政府は教科書から軍の関与の記事を削除させた。「軍隊に強制された死」があったことは、沖縄の人々にとって周知の事実であるのに、政府はあえて歴史教科書からこの事実を消し去ろうとしている。

「(戦争のできる)普通の国」を目指すわが国政府は、過去の戦争を正当化し戦死を美化しようとする。靖国神社による合祀も、沖縄戦の歴史改ざんも共に国家目的による死者の利用であり、決して許すことはできない。

安倍首相は「憲法改正」を最重要政策として挙げ、自衛隊法を改悪し、防衛庁を防衛省に昇格せしめ、海外派遣を自衛隊の本来業務とした。さらには改憲手続法を成立させ、教育基本法の改悪を具体化する教育関連法案を強行採決した。

国家や政治権力が悪しき道に突き進むとき、教育や宗教を利用する。過去の日本においても、政治権力が宗教に結びつくこと(国家神道)により、「政教分離」「信教の自由」が侵され、思想統制が行なわれた。その結果人々の口は封じられ、大量殺戮であるだけでなく、人権侵害と環境破壊の極みである戦争へと引き込まれ、反対を唱えることさえできなくなった悲惨な経験を忘れてはならない。私たちは、わが国が再び戦争への道を進んでいることに反対する。私たちはキリストにあって、小さく弱くされている人たちと共に生きるものでありたいと告白し、すべての暴力を否定し、国籍を超えて全ての人々の命が慈しまれる世界のために祈り働く。

私たちは信仰に立って次のことを確認する。

- ・ 教科書から“沖縄戦における「集団自決」に対する日本軍の関与”を削除したことに抗議し、正しい歴史教育の実施を求める。
- ・ 自衛隊による市民団体等に対する監視の即時中止を求める。
- ・ 教師への思想弾圧の手段となりうる教員免許更新制の廃止を求める。
- ・ 改悪された教育基本法の廃止を求める。
- ・ 日本が戦争へと向かう精神的支えとして、再び靖国神社を利用する動きに大きな危惧を覚え、首相をはじめ政治に携わる人たちの靖国神社公式参拝に反対する。
- ・ 靖国神社に対し、遺族の意思に反する合祀の取り消しを求める。
- ・ 時間をも天皇が支配することを象徴する元号の使用を拒否する。
- ・ 「戦争放棄」を否定し、「信教の自由」を奪おうとする、憲法改悪に反対する。
- ・ 「新しい歴史教科書をつくる会」の歴史・公民教科書の教育現場での採用に反対する。
- ・ 日の丸・君が代の強制に代表される、教育現場での国家統制の強化に反対する。
- ・ 国民保護法に反対し、軍民一体化を図る国民保護計画に反対する。
- ・ 航空自衛隊の海外派遣に反対し、イラクからの即時撤退を求める。

私たちは、愛と平和の主であるイエス・キリストにのみ従い、「平和をつくりだす者」として歩み続ける。

2007年8月12日

日本バプテスト連盟堺キリスト教会 平和セミナー参加者一同

*堺バプテスト教会では、毎年2月と8月に平和セミナーを開催し、上記のような宣言文を採択しているそうです。興味のある方は、お問い合わせください。

東京地方バプテスト教会連合

陸上自衛隊情報保全隊の違憲行為に抗議し、 人権侵害を被った諸団体・個人への謝罪を求める声明

防衛大臣 高村正彦殿

陸上自衛隊の情報流出防止機関である情報保全隊が、2003年11月から2004年2月までイラク派兵に反対の意見を表明する市民・団体を監視していたことが、6月6日報道などによって明らかになりました。わたしたちは、この民主主義と立憲主義の根幹を踏みにじる行為に抗議し、今回明らかにされた被監視団体・個人に対する防衛省からの誠実な謝罪を求めます。

情報保全隊の監視行動は、その本来の業務・自衛隊の秘密保持から逸脱しています。また監視行動の理由として久間元防衛相は、「イラクに行った(隊員の)家族のために情報収集に回った」と記者団に語りましたが、これもまた本来の業務とは関係のない理由です。しかも、公開された資料によると、監視行動の真の理由は「反自衛隊活動」をする個人・団体・報道機関の調査・思想統制です。それは戦前の憲兵隊や特別高等警察の行った人権侵害と軌を一にするものです。

国家権力による特定の思想、特に国家権力を批判する思想への監視は、憲法の保障する表現の自由・思想の自由・信教の自由・結社の自由などを脅かす違憲行為です。戦前の軍国主義と侵略戦争を支えた思想統制への反省から、基本的人権の核となるこれらの自由が憲法に明記されたのです。にもかかわらず、憲法遵守義務を負う歴代防衛大臣久間・小池・そして貴職も、自らの違憲行為に対し未だに何らの反省も謝罪も示していないことに、わたしたちは深い憤りを感じています。

今回の事件を通して、軍隊は国民を守るのではなく軍隊自身を守ろうとすること、文民統制が機能していないこと、情報の機密性を重視する軍事体制と情報の透明性を重視する民主主義とが相容れないこと、監視社会の行き着く先は戦前のような警察国家であること、自衛隊の存在・米軍基地の存在・日米安全保障条約の存在が憲法違反なのだということが明らかになりました。

わたしたち東京地方バプテスト教会連合は、「反自衛隊活動」をする団体として監視され、著しい人権侵害を被った団体・個人の痛みと共に抗議の声を明らかにし、それらの人々に対する防衛省からの誠実な謝罪を求めます。

東京地方バプテスト教会連合
会長・大谷唯信

2007年9月4日

憲法 世界の声

各国議会は、日本国憲法9条のような、政府が戦争をすることを禁止する決議を採択すべきである。(ハーグ平和アピール採択文書「公正な世界秩序のための10の基本原則」1999年5月) 紛争解決の手段としての戦争およびそのための戦力の保持を放棄したという9条の原則は、普遍的価値を有するものと認知されるべきであって、東北アジアの平和の基盤として活用されるべきである。(平和のための地域的メカニズムの創造を目指して「武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ(GPPAC)東北アジア地域行動提言 東京アジェンダ」2005年2月) 世界には、規範的・法的誓約が地域の安定を促進し信頼を増進させるための重要な役割を果たしている地域がある。例えば日本国憲法9条は、紛争解決の手段としての戦争を放棄すると共に、その目的で戦力の保持を放棄している。これは、アジア太平洋地域全体の集団的安全保障の土台となってきた。(平和を築く人々:暴力紛争予防のための世界行動提言「GPPAC世界提言」2005年7月)

私と憲法 各地の声

平和を実現する人々

灼熱の太陽が身体も心も溶かしてしまうような日、私は日本の敗戦を知りました。62年前の8月15日のことは今も心に深く刻まれています。「東洋永遠の平和のため」の「聖戦」だと教え込まれ、「敵は幾万ありとて、すべて烏合の衆なるぞ。烏合の衆に非ずとも味方に正しき道理あり、などて恐ることやある」と勇ましく軍歌を歌いながら、「欲しがりません勝つまでは」と歯を食いしばり、「海往かば水く屍、山往かば草むす屍。大君の辺にこそ死なめ、顧みはせじ」と悲壮な決意を胸に、聖戦遂行のために身を挺そうとしていた13歳の少年にとって、それは文字通り驚天動地とも言うべき出来事でした。

しかし、あの戦争がそのまま続いていたらどんなことになっていたでしょうか。国が焦土と化し、無辜の人命が無残に失われるだけではありません。第3、第4の原爆が、と思うだけでも慄然とします。今日の私も間違いなく存在し得なかったでしょう。聖戦と信じ、今思えば独りよがりな崇高な精神に踊らされて、どこか人並みに？死に急ごうとしていた私は、敗戦という冷厳な事実と直面し、同時に戦争のおぞましい実態を知らされるにつけ、自分自身を含めた人間の愚かさや罪深さを思い知らされずにおれませんでした。戦争の放棄を謳った新憲法は新生日本の誕生を内外に宣言した世界に誇るべきものですが、私にとっても自らのキリストによる新生体験と重なって、人生の道筋をそれこそ180度転換させるほどの意味を持つものでした。人類普遍的な価値を格調高く説き、平和への決意を述べた憲法前文や第9条を目にして心燃やした中学生時代は、極度の貧しさと飢餓に直面し、生活苦に喘ぐという面では戦時中を凌ぐものがありましたが、決して惨めではありませんでした。希望に燃えていたのです。

あれから半世紀以上が過ぎました。当時とは比較できないほどの物質的な豊かさと繁栄を享受しながら、私たちの現実はどうなのでしょう。憲法改正への動きは年金問題等の陰に隠れて参院選挙の表看板にはなりませんでしたが、「普通の国」「美しい国」を標榜し世界の潮流に乗り遅れまいとする勢力に、どのような夢や理想があるのでしょうか。結局は力への信仰が一層高度化された軍事力を抑止力と称して自らの正義を振りかざし、力の支配を実現させるばかりではないのでしょうか。戦時中もそうでしたが、「平和のための聖戦」意識とプロパガンダは今日も耐えることなく、むしろより巧妙に造り出されています。戦時中の日本が擬似宗教国家だったことも見逃してはならないでしょう。キリスト教会もそのような国家体制を批判することも正すことも出来ずに「聖戦遂行」の一役を買った痛恨の歴史を担っています。

過去の過ちを論じ、信仰の先輩たちの不信仰を告発するものではありません。私たちの今を問わねばならないと思うのです。力への信仰は私たちをも虜にしようとしています。数を頼んだり、人よりも優位を保とうとするところに本当の平和が実現するのでしょうか。聖書では「平和」は「平安」とほとんど同義語です。「平和(平安)があるように」と呼びかけておられる十字架の主を真実に仰ぎましょう。そこから平和が始まるのです。

(金子純雄 / 仙台北バプテスト教会牧師
仙台北バプテスト教会 月報第5号
2007年7月29日 8月のことばより)

憲法改悪を許さない私たちの共同アクション

ACTION for PEACE

